

# 非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究

## ～日本型教育先進地エジプトにおける Tokkatsu の効果検証～

### 2023 年度年次報告書

2024 年 2 月 26 日

## 1. 研究の目的とその体制状況

### (1) 目的

本研究は、エジプトの小学校で導入・実施されている特別活動(Tokkatsu)の現地化の実態を調査し、個人と社会のウェルビーイングを支える要素ともいわれ生涯にわたって必要な学びに向かう力)に与える影響を明らかにする。加えて、エジプトの関係者と共同で、質保証を目的とするディプロマ・プログラムを作成することを通じ、国際的通用性と倫理性を備えたグローバル・スタンダードな日本型教育モデルを開発する。

エジプトで実施中のODA事業と相乗効果を発揮するとともに、カイロ日本人学校の協力を得て、人材の重層的ネットワーク強化にも貢献する。また、日本特別活動学会との連携を通じて、調査結果を国内に還元し、日本の教育の国際化につなげるとともに、将来的にグローバルサウスと呼ばれる国々の教育改善にも貢献できる知見の創出を目指す。

### (2) 目的の達成状況

2023 年 12 月 23 日(土)～31 日(月)にエジプト(カイロ)にて現地調査を実施した。エジプト日本学校(EJS)3 校を訪問し、3 つの学級会と 3 つの授業(教科指導)を参与観察するとともに、教師 10 名、児童 21 名、Tokkatsu オフィサー 10 名に対してインタビュー調査を行った。また、教師 10 名、保護者 5 名、Tokkatsu オフィサー 5 名による参加型評価を実施し、Tokkatsu を通じた児童、教師、学校の変化について検証した。調査対象者の数値目標は計画を上回っており、データの詳細な分析はこれからではあるものの、Tokkatsu が非認知能力の向上に与えた影響について一定程度明らかにできたと考えている。

Tokkatsu ディプロマの開発に向けてエジプト側と 3 回にわたるオンライン協議を行うとともに、多様なステークホルダーが一同に会する合同イベントを対面開催し、66 名が参加した。またキーパーソンによる議事録への署名が行われ、Tokkatsu の質保証という目的の達成に向けて前進することができた。さらに、日本側 10 名、エジプト側 10 名による Tokkatsu オフィサーのモニタリング実習を公開実施し、質保証に向けた実践的知見を獲得した。

カイロ日本人学校と EJS との交流に関しては、2 回(オンライン・対面)にわたる合同の授業研究会を企画・運営し、計 55 名が参加した。教師による授業研究という新たな連携モデルを生み出したことで、人材の重層的ネットワーク強化に寄与することができた。

一連の成果については、日本特別活動学会の公開イベントにおいて 2 本の間接報告を行い、60 名の参加を得たほか、英文書籍 1 点が刊行予定である。専用ウェブサイト構築して恒常的に情報発信をしており、国内外に対して一定の還元ができたと認識している。

研究全体を通しては、日本側の参加者 183 名、相手国側の参加者 228 名であり、目標を大きく上回る結果となった。参加した教員を通じて日本の教育の国際化に寄与するとともに、エジプトとの共同事業によって相互理解を促進し、SDGsの実現にも微力ながら貢献できたと考えている。日本の経済成長については、現時点で即時的な効果は確認できないものの、今後の可能性を拡大させることができた。

## 2. 活動内容とアウトプットの達成状況

活動①	エジプトの小学校でのTokkatsuの調査
どのように実施するか	エジプト日本学校 2 校、公立学校(パイオニア校)2 校において、授業の参与観察、学級会 360 度動画の分析、Tokkatsu 導入マニュアルの分析、教師(12 名)・児童(12 名)へのインタビューを行う。調査内容は、カスタマイズの特徴、話し合い活動の方法、個と集団の関係性、負の側面への対応、教師間の協働・同僚性、などである。
期待されるアウトプット	ナショナルな文脈を超えて発揮される特別活動の非認知能力育成機能を分析することで、日本型モデルの適用可能性を明らかにできる。また、多様性を認めない同調圧力、集団による個人のコントロールといった特別活動が及ぼしうる負の作用をエジプトがどのように認識し、乗り越えようとしているか考察することで、国際教育開発をめぐる倫理的課題に応答できる。
活動実績(活動内容・方法)	2023年12月25日、26日、28日にエジプト日本学校3校を訪問し、4つの学級会、および2つの授業(教科指導)を参与観察し、教師2名・児童6名に1人30分の事後インタビューを行った(写真1)。また、教師8名、児童15名に対して、Tokkatsuに対する認識に関するインタビューを1人30～60分実施した。さらにモスト・シグニフカント・チェンジ(MSC)による参加型評価を実施し、教師、保護者、Tokkatsuオフィサーの計20名で、Tokkatsuの効果を検証した(写真2)。
アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問学校数:エジプト日本学校3校</li> <li>・インタビューの人数:教師10名、児童21名、</li> <li>・参加型評価の参加人数:教師10名、保護者5名、Tokkatsuオフィサー5名</li> </ul> <p>学級会の参与観察からは、導入当初より教師の発言率が低下し、「教師が動かして教師が決める学級会」から「児童が動いて児童が決める学級会」へ進化していること、発言のつながり率が向上し、「個々の児童が自分の思いを主張する学級会」から「人の話をよく聞いて、その思いを受けて発言する 学級会」へ進化していることが明らかになった。</p>

	<p>児童と教師に対するインタビューでは、児童が「自由に意見が言えるようになった、他者に認められ感謝されることで自信がついた、学校内外で他者と協力するようになった、問題が起こった時にみんなで話して解決できるようになった、そのことで友達との見方も変わってきた、といったことが明らかになった。</p> <p>MSCによる参加型評価では、子どもについて「自由に表現」「協力的に批判」「探究」「問題解決」「協力」「他者や違いを受け入れる」「リーダーシップ」「責任感」「自己肯定感」「自信」といった変化が、教師について、「個性や思いについて、より配慮」「異なる方法や代替案をもって子どもを支援」「同僚の経験を生かす」「自身の改善、発達」といった変化が、学校について「健康的で新しい生活様式」「子どもにとって魅力的な場所」「保護者との協力のもと、よい計画を立てる」「他者の意見に耳を傾け、活用」「評価、改善を継続的に行う」「学校が1つのチーム、共同体として統合」といった変化が示された。</p>
--	---



写真 1 学級会の参与観察



写真 2 モスト・シグニフカント・チェンジ(MSC)

活動②	Tokkatsuオフィサー研修・認証制度の調査
どのように実施するか	<p>教育・技術教育省、研修協力機関、県教育事務所において、「能力一覧」等の資料分析、研修の参与観察、受講者(TO)へのインタビュー(6名)を行う。調査内容は、新制度導入の背景、効果、教師のニーズ、Tokkatsuの専門性、大学等との連携、などである。</p>
期待されるアウトプット	<p>Tokkatsuを担う教師の専門性の向上は日本でも課題となっており、共同研究によってこれまでにない意識啓発・指導力育成の方法を考案できる。それはエジプトの教師の実践力向上とともに、「逆輸入」によって日本における「特別活動推進教師」の構想につながる。さらに、非認知学習を対象にした授業研究(レッスンスタディ)の手法を構築することにも貢献する。</p>

活動実績(活動内容・方法)	<p>2023年12月25日、26日、28日にエジプト日本学校3校を訪問し、Tokkatsuオフィサー10名を対象に、自身の役割、専門性の向上、外部との連携などについて1人60分のインタビューを実施した(写真3)。</p> <p>また、26日にはTokkatsuオフィサー研修・認証制度におけるモニタリング実習を、公開で実施した(写真4)。</p> <p>さらに26日には、エジプト教育技術教育省エジプト日本学校プロジェクト管理運営部を訪問し、部長およびアドバイザーと意見交換するとともに、Tokkatsuオフィサー2名からTokkatsuオフィサーの役割と経験に関してレクチャーを受けた。</p>
アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビューの人数: Tokkatsuオフィサー10名</li> <li>・モニタリング実習の参加人数: 日本側5名、エジプト側5名</li> </ul> <p>Tokkatsuオフィサーへのインタビューでは、エジプトでは子どもが他者の意見を聞いたり協力したりする機会がなかったため、個々人が能力を生かせていない状況だったが、Tokkatsuが児童1人1人に役割を与え、自分の力を発見して実践する場を提供したことか語られた。</p> <p>一方で、一般校に普及しない背景には、①教師の給与の問題、②1教室あたりの児童数の数、③保護者への理解、④校長の理解、があり、教師の専門性向上以外にも様々な条件整備が必要であることが明らかになった。</p> <p>公開モニタリング実習では、エジプト国立大学教育学部から教員が新たに評価委員に加わったことから、それらの委員に評価ツールを用いて評価してもらい、全員のメンバーの評点を比べて平準化する手続きを試みた。今回利用された評価ツールは、今後、エジプトの新委員やエジプトに滞在する日本人関係者によってループリック化され、実際の指導員評価で利用する予定である。</p>



写真3 Tokkatsu オフィサーへのインタビュー 写真4 Tokkatsu オフィサーモニタリング実習

活動③	Tokkatsuディプロマの共同開発に向けた協議
どのように実施するか	活動①、②と並行して、ディプロマ・プログラムの内容と実施体制について、エジプト科学技術大学およびカイロ大学の研究者と協議する。
期待されるアウトプット	日本とエジプトが協力してTokkatsuの研修コースを開発することで、日本型教育の体系的な質保証に寄与する。また実践者・研究者主体の互恵的・継続的に学び合う「草の根交流」モデルを構築することで、ナショナリズムや覇権競争に陥らない教育トランスファーの実現に貢献できる。
活動実績(活動内容・方法)	<p>エジプト側と合計で、3回のオンライン会議(うち1回は対面併用)を行った。</p> <p>2023年12月27日午前、日本式教育の成果と今後の展望について検討する合同イベントを開催し、エジプト日本科学技術大学、エジプト国最高大学評議会教育学部委員会、エジプトの国立大学教育学部関係者、エジプト教育技術教育省エジプト日本学校(EJS)プロジェクト管理運営部、EJS関係者などが参加した(写真5)。さらに発表を受けて、4部屋に分けてグループディスカッションを実施し、Tokkatsuの導入・実践に関わった当事者に直接質問した。</p> <p>午後からは、エジプト日本科学技術大学学長、エジプト国最高大学評議会教育学部委員会委員長と、Tokkatsuディプロマの開発に向けた協議を行い、その結果を議事録にまとめて署名した(写真6)。さらに、いくつかのエジプトの国立大学教育学部の参加者も加わって、ラウンドテーブルを実施し、ディプロマ創設のためのタスクについて整理した。</p>
アウトプット	<p>・オンライン会議の回数:3回</p> <p>・合同イベント・ラウンドテーブル参加者数:エジプト日本科学技術大学4名、エジプト国最高大学評議会教育学部委員会2名、エジプトの国立大学教育学部教員9名、エジプト教育技術教育省エジプト日本学校プロジェクト管理運営部4名、EJS教師13名、Tokkatsuオフィサー14名</p> <p>合同イベントは、日本と協力して高等教育段階で工学を中心とした教育と研究を進めるエジプト日本科学技術大学と、初等教育段階で特別活動を中心とした教育を進めるエジプト日本学校とが、共にその成果を発表する初の機会となった。</p> <p>Tokkatsuディプロマに関する協議では、以下のような構想・方向性</p>

	<p>が共有された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エデュケーション2.0により新しく導入されたTokkatsuを維持し、教員養成においても喫緊の需要に応えるため、ディプロマ・プログラム開発に向けて、日・エの両国がコンソーシアム形成を目指す。</li> <li>・双方の関係団体、がフォーカルパーソンを設置する。</li> <li>・エジプト日本科学技術大学は、Tokkatsuの振興のため、関心を有するエジプトと日本の大学や学術団体のハブとなる。</li> </ul>
--	--



写真 5 E-JUST での合同イベント



写真 6 ディプロマ開発に向けた議事録への署名

活動④	カイロ日本人学校とエジプト日本学校との教職員の交流
どのように実施するか	本研究のメンバーのファシリテートのもと、カイロ日本人学校とエジプト日本学校(EJS)(2校)との間で、小学校教師(20名)の交流会を実施する。Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事(学芸会や運動会)や保護者交流の可能性について議論する。
期待されるアウトプット	Tokkatsu(特別活動)の普及・発展に対して両校の教師が協力する体制を築くことにより、本研究やJICAの支援事業が終了した後の持続可能性に貢献する。
活動実績(活動内容・方法)	<p>2023年9月18日にカイロ日本人学校(CJS)において、小学部第1・2学年の学級活動の公開授業が開催され、エジプト日本人学校(EJS)の教師も参加した。授業後には、CJSとEJSの教師による合同の授業研究会(レッスンスタディ)を実施し、EDU-Port調査研究チームのメンバー3人がコメンテーターを務めた。</p> <p>12月28日には、CJSとEJSとの間で2回目の合同の授業研究会を実施した。具体的には、参加者全員による模擬学級会を実施し(写真7)、決まったことを実践し(写真8)、実践後に振り返り活動(グループインタビュー)を行った。</p>

<p>アウトプット</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流したEJSの学校数:2校</li> <li>・第1回授業研究会の参加者数: EJSの教師10名、CJSの教師10名、CJSの児童6名、他の日本の教師等6名</li> <li>・第2回授業研究会の参加者数: EJSの教師12名、CJSの教師2名、他の日本の教師等9名</li> </ul> <p>第1回の授業研究会(公開授業・意見交換会)では、Tokkatsuを日々実践しているEJSの教師から多くの発言があり、白熱した議論が展開された。</p> <p>第2回の授業研究会(模擬学級会)では、交流相手の立場を考慮して、自分自身の考えを伝える日本側の発言に応じて、エジプト側からも交流の意義を考えながら発言する姿が見られた。記録は日本語とアラビア語を同時に行い、進行状況を確認しながら話し合うことができた。互いのよいところを取り入れたり、不都合な点を取り下げたりするなど、折り合いをつけて話し合う様子を意図的に演じる場面があった。日本側が手本を示す場面はあったが、エジプト側の話し合い活動の進行の仕方や留意点に対する理解は徹底されていた。</p>
---------------	---



写真7 CJSとEJSによる模擬学級会



写真8 模擬学級会後の実践

活動⑤	調査・研究の中間報告
どのように実施するか	日本特別活動学会で研究成果の中間報告(公開)を行う。
期待されるアウトプット	研究成果を日本およびエジプト教育関係者に還元するとともに、ディスカッションを通して、国際性を備えた日本型教育の開発に向けた知見を蓄積する。
活動実績(活動内容・方法)	2024年1月20日(土)に、日本特別活動学会2023年度第8回特活カフェ(重点課題研究プロジェクト発表会)において、本研究の中間報告をオンラインで行った。

	<p>①京免徹雄・小泉琢磨・平田幸男・鈴木純一郎・天野幸輔・平野修・添田晴雄・相庭貴行「グローバル・スタンダードとしての日本型教育モデルの開発—Tokkatsuの海外展開の分析—」</p> <p>②杉田洋・瀬戸口暢浩「エジプト国における特別活動等のディプロマの研究」</p> <p>また、現地調査のデータを直接利用してはいないものの、本調査研究から得た知見を活かした英文書籍(分担著)が刊行される予定である。</p> <p>Kyomen, T. Tokkatsu: Reality, significance, and challenges in global contexts. Ida, Y et al.(Eds.) <i>Human Diversity and Educational Equity in Japan - Well-being in the Human Sciences Landscape</i>, Springer Nature: Singapore, 印刷中。</p> <p>さらに、研究成果を恒常的に発信するために専用ウェブサイトを構築した。</p>
<p>アウトプット</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間報告の数:2本</li> <li>・報告会の参加者数:リアルタイム30名、オンデマンド30名</li> <li>・書籍の数:1件</li> <li>・調査事業の専用ウェブサイト</li> </ul> <p><a href="https://tokkatsu-eduport.education.tsukuba.ac.jp/">https://tokkatsu-eduport.education.tsukuba.ac.jp/</a></p>

(業務計画書に記載した活動以外の活動)

#### ○在エジプト日本国大使館の訪問

2023年12月25日に在エジプト日本国大使館および大使公邸を表敬訪問し、エジプトと日本の協力関係について、大使および職員2名と意見交換した(写真9)。

#### ○EJSスーパーバイザーとの交流

12月27日に、EJSスーパーバイザー9名と意見交換を行い、日本人スーパーバイザーの役割、およびTokkatsuの現状と課題について協議した。

#### ○日本式公民館との交流

12月29日に、ギザ県のター公民館を訪問して意見交換した(写真10)。同公民館は、EDU-Port ニッポンの先輩プロジェクトであり、「エジプトにおける教育イノベーション創出事業～日本式公民館の運営および社会教育の学びを通じて～」を実施していた。アラブの春を経験したエジプトで、若者の社会参画を促進するという大きな目標を掲げて活動が実施されており、日本語、アニメ、けん玉など日本につながる技術やモノが積極的に活用されていた。





写真 9 在エジプト日本国大使館との意見交換



写真 10 ター公民館での交流

以上